

# 宋代「金石学」の再評価

## —士大夫社会との接点からの一視座—

段 宇

### 第1節 「金石学」定義批判

「金石学」という用語は、日本語では鉱物学を指す言葉として使われてきたものの、今現在『大漢和辞典』によると「金・石の遺物にある銘文を研究する学問。金文・石刻の二部門をなし、更に甲骨文・陶文などの分野がある」と定義している。概略的なイメージとして、金石学は中国古代の金属器・石刻の上に刻まれた銘文や画像を研究する学問である。

具体的な定義を追求するならば、馬衡氏は「金石というものは、今まで伝わってきた金石などを媒質として、古人によって残された遺文、あるいは意識的な作品全てを指す。このような資料を用い、それらを客観的に研究し史学に貢献することを金石学という。古代の人間によって残された資料のなかで、中国史に関係あることは中国金石学という」と論じた<sup>[1]</sup>。しかしこの論調は、実在した歴史上の金石学の定義を拡大したもので、曖昧である。実際、研究する側から見れば、金石文物以外の法帖・図録などというまでもなく、金石についての論著などでは現在、二次史料と呼ばれているものも含んでおり、たとえ金石文物が失われても、拓本や記録により金石学研究も可能である。また、金石学は史料学の一分野ではなく、史学だけに貢献するわけではないと指摘すべきである。陸和九氏は金石学が古文字学・文学・史学・経学・考古学・芸術という六つの分野に役立つと述べている<sup>[2]</sup>。

ただ、陸氏はこの金石学を「世界の金石学」の一部分と定義し、ローマの十二表（Lex Duodecim Tabularum）の研究に属すると示唆した<sup>[3]</sup>。しかし、この説は事実と甚だしく乖離した面がある。研究対象はいずれも古代に刻まれた金文・石文ではあるが、金文・石文とは何かとの問題に対し、それぞれの視点からすると決定的な相違があるので、金石学とローマの十二表研究に代表される碑文学は付属関係ではなく異なる分野であることがわかる。ヨーロッパを起源とする碑文学（epigraphy）は、書き残されたものを解明するという意味で、考古学の道具もしくは歴史学の補助的な学問として分類されている。堅い媒質に刻まれた文字自体が碑文学の主要な研究対象であるが、銘文の内容と分けて考えている。銘文の本文については、形式・体裁・伝承に関する研究が少なく、テキストそのものが研究されている。碑文学は贗物を見破るのにも活躍しているが、審美的機能はほとんどついていないという。

これに対して日本での金石学研究は、江戸時代の狩谷楳斎の『古京遺文』や西田直養の『金石年表』のような代表的な成果があり、ある程度発展したのだったが、今は金石学を全体的に継承しておらず、比較的金石学を重視する傾向があるのは書道史研究である。近代以来、著名な成果としては、藤原楚水『書道金石学』（三省堂、1953年）や足立豊・石田肇『書道金石学』（同朋舎出版、『書学大系研究篇』第五巻、1989年）があり、いずれも「書道」という語を冠していることからわかるように、金石学のうちの審美にのみ関心を傾けている。近代以降、コロタイプ印刷術の普及により図版を使う研究が盛んになる前には、碑文学は研究対象の特徴を記載する二次史料の紙質文献を使う研究を置き去りにした。しかも、ローマの十二表研究に代表される碑文学は、十六世紀以降になされたラテン文字で刻まれた銘文の研究に基づき、徐々に発展してきたものであり、十世紀にはじめて発展の全盛期を迎えた金石学と比べると六百年余り遅く、もし十世紀の「宋朝の金石学」を語ろうとするなら、「世界の金石学」に位置づけることが難しいであろう。このような比較方法の欠点があり、陳寅恪氏が指摘したように、「比較研究の方法を適用するのは、歴史的な変化もしくは系統的な異同観念に基づかなければならない」<sup>[4]</sup>。

書道史との関連といえば、成立初期の金石学では書道との関連は強くはなかった。特に宋の時代の書体に対する影響がほとんどないと言われる<sup>[5]</sup>。その後、清の時代に至り、「考輿の学」の発達に酔う能書家たちによって、金石学によって収録された資料の審美的価値が再発見された。宋代と清代の「金石学」は社会との繋がりについての共通点があるが、定義から見てみれば別物として扱うべきである。

朱劍心氏は「金石学は何なのか。中国歴代の金石の名義・形式・制度・沿革および隠された文字図像の体裁・作風を研究する学問である。」「『金』とは何なのか。鐘・鼎・彝器を主体とするも、他に兵器・度量衡器・符璽・古銭・鏡鑑などの古銅器は、銘文のあるなしに拘わらず、すべて『金』のものに属する。『石』とは何なのか。碑・碣・墓志を主体とするも、他に摩崖・彫像・経幢・柱礎・石闕などの古代石刻のなかで、文字・図像があるもの全ては『石』のものに属する。」と規定した<sup>[6]</sup>。この定義が簡潔でよく整っており、『大漢和辞典』の定義と一致している。しかし、朱氏の補充した説明によると、「最近の考古発掘の進歩により出土史料が増えてきた。殷墟の甲骨・燕斉の陶器・西域の簡牘・河洛の明器は体裁上金石にとどまらず、専門的な学問分野になり得るが、すべて金石学に属するべきである。」と結論付けた<sup>[7]</sup>。この補充した論述は前述した馬衡氏の定義「古人により残された遺文、あるいはすべての意識的な作品」と同じ趣旨であるが、実在の研究状況とは合致しないであろう。金石学を母体として生れた甲骨学・簡牘学など細分化された領域は、研究の進歩により相次いで独立した学問となる。上述した学問と金石学との関係を中国目録学の発展過程のなかで

賦の地位と比べると、似たようなパラダイムであると考えられる。もともと賦という体裁は「楚辞類」に分類されたが、漢代には賦の創作が盛んであったので、数が膨大になり他に一部類を作らなければならなかった。「六芸の附庸，蔚して大国になり」<sup>[8]</sup>という。要するに、各時期において金石学自身の発展する水準を意識して、時代別かつ具体的に分析した方がよからう。

羅振玉氏は「金石学」と「古器物学」の関係を以下のように論じた。

宋の人『博古図』を作り，古器物を取輯す。三代の礼器を以て多きと為すと雖も，而るに範圍至り広し。後世に逮び，変えて彝器・款識の学と為し，其の器古吉金に限り，其の学則ち古文字に力を専らにす。其の造詣は前人に精げるも，而も範圍則ち隘く転ず。古器物の名亦た宋人より創る。趙明誠『金石録』を撰び，その門目「古器物銘」及び「碑」を分けて二と為り，金蔡珪『古器物譜』を撰び，尚ほ此の称を沿す。嘉・道以来，始めて礼器の外兼ねて他古物を取む。劉燕亭・張叔未諸家に至れば，取羅益々広まる。然るに斯の学者に為りても，率ね金石学に附庸す。卒に嘗て其の名を正さず。今定めて曰はく「古器物学」，蓋し古器物能く金石学を包括す，金石学固より能く古器物を包括せざるなり。<sup>[9]</sup>

羅氏によって，金石学は「古器物学」に包括されるとの関係が解釈された。研究の対象が異なるため，特に甲骨の発見以降出土した金石ではない史料を「古器物学」に分けた。しかし，今までの研究の現状に合致しようとするこの一説では，実は問題がある。なぜならば，包括したものが異なる「金石学」を「古器物学」と呼ぶのは，羅氏の個人的な定義に過ぎず，学界では「古器物学」の概念を受容していない。逆に歴史上の金石資料を主体とする出土資料全般を研究対象とする学問は「金石学」と呼ばれる。例を挙げるならば，宋の時代において簡牘の発見は二回のみであるので，その影響は小さく，よって主に金・石資料の研究に分類される。王国維が言うには，

而るに金石の外，瓦当の若き，木簡の若きは，当時の好古家の網羅の内に在らざること無し，此れ宋人の蒐集の大功なり。<sup>[10]</sup>

との熱意を持ち，ほかの出土資料も対象とする金石学の研究を賞賛した。

葉国良氏の研究には朱氏の定義に依拠しようとしているが，実際は葉氏が提唱している古器物研究の方法は朱氏のパラダイムを越え，現代的な考古学の方法から受け入れることが多

い<sup>[11]</sup>。ここで陸和九氏の主張に従って、金石学と考古学を関連させて考えた方を貫き、定義の一致性を注意して首尾よく論じられたほうが良いと考えている。

宋代の金石学研究の隆盛は学者によく賞賛された。中国において広義的な金石研究の歴史といえば、司馬遷が『史記』・秦始皇本紀を創作するときに秦の刻石の碑文を記録したことにまで遡ることができる。また、金石専門の著作は晋の陳繆の『雜碑』と『碑文』に始まるが、金石に関する知識が学問になったのは宋の時代だったとされる。政治的かつ経済的に安定した環境によって培われた、教養が高い宋の文人や士大夫たちは、唐代の人々の法帖への好みを継承し、金石の学問をシステム化した。その一因として、宋代では皇室をはじめ、社会全体が鑑賞する意欲と研究する意欲が満ちており、それによって骨董品と法帖を嗜んだので、金石研究は確実に促進された。葉国良氏によれば、前代と比べ、宋の時代に新たに成立した金石学は以下の特徴がある。

- (一) 石刻に関する専門著作が多い
- (二) 記録された金石器物が多い
- (三) 金石学学者が多い
- (四) 研究方法が確立された<sup>[12]</sup>

ここで葉氏の挙げた論述の中の(一)から(三)は、金石学自身の発展に注目し、まるでデータを分析したかのように叙述している。前代の成果は陶弘景の『古今刀劍録』にのみ残っているのに対して、宋代の金石に関する専門著作は百五十種弱まで達する。宋代よりも以前の、最も多くの石刻文字を記載した酈道元の『水経注』の中に収録された二百点あまりのテキスト化した銘文と比べると、宋の趙明誠・向士彪の所蔵は二千点以上にものぼる。そして、宋より前のわずか五十人余りの金石学者が松丸道雄氏の『新編金石学録』の中に取り上げられているのに対し、宋の時代では三百人以上がこの系譜に記載された。それは王国維氏によると、金石学が「宋代の学問」だと絶賛されたことを表している。しかし、この発展は金石学が専門的な学問に成り得る各要素を備えている点しかなく、十分な説得力になり得ておらず、優雅な趣味に富んだ知識がなぜ文化から学問へ転回したのか、どのように「金石学」の成立までパラダイムシフトをしたのかという命題に答えるべきであろう。葉氏の述べる四点目の特徴である「研究方法が確立された」とは、首肯できる意見であり、王国維氏の意見と照らし合わせると、王氏の意見は詳しく述べると以下の五点である。

- (一) 研究の対象が古器物に拡大したこと
- (二) 碑を拓写する方法を器物に運用したこと
- (三) 図譜目録を編纂し文物の様相をあまねく伝えたこと
- (四) 形式の研究を充分に行ったこと

(五) 研究成果をきちんと運用し多くの学問の問題を解決したこと

しかしながら、これは結論としては認識に偏りがあると考えられ、この問題を当時の学術環境下に置いて全体的に考えなければならない。具体的にいうと、宋代の学問の系譜に金石学をどのように位置づけるのかを確認する必要がある。したがって、宋の時代に「辨章學術・考鏡源流」の学問とされた目録学の成果から、金石学の地位の検討をおこなうべきである。

## 第2節 学問としての金石学の成立

武内義雄氏は『支那学研究法』のなかで、目録学は文字音韻学と並んで、中国の学問を研究する二本の足だと称えられている。宋のはじめの目録学の成果の例として挙げる書物は、官修の正史に入っている『新唐書』芸文志である。伝承の過程が明確であるので、完本とされるこの目録学の名著において、金石学の専門的な著作がまだ載っていないことは明らかである。意味深いのは、『新唐書』の編纂者は金石学の父とされる欧陽脩である。金石についての知識を備えた彼が編集した『新唐書』芸文志のなかで金石の専門的な著作は収録されていないのは、金石学が宋代以前の学術の系譜に入れなかったと考えられる。ただ、関連する著作は『隋書』経籍志の分類を継承し、乙部小学類のほか丙部農家・小説家のなかにも散見される。

その次に成立した『崇文総目』は、現在残本しか残っていないが、その中には『古今刀劍録』、『古今鼎録』、『古鑑記』、『銅劍譜』、『錢譜』などが収録されている。現本<sup>[13]</sup>では「子部小説家」としているが、流布の過程で本来の面貌を失ってしまった恐れがある。晁公武の『郡齋讀書志』は歌碑研究の著作である『宝刻叢章』を収録し、集部別集類に分類された。陳振孫は『直齋書録解題』の中では意識的に金石学の著作を部類化したと述べている。陳氏は『京兆金石録』・『集古録跋尾』・『集古目録』・『金石録』・『宣和博古図』・『考古図』・『博古図説』・『集古計時録』・『宝刻叢編』を目録類に分類し、これらは後世の目録である「史部一目録類—金石の属」の発端となるので、意義深いと言うべきである。ただ、この陳氏の目録では、上述した金石学の専門的な著作は順番に列挙されていたが、このほかにも書録や書道などに関する著作がある。分類の思想を考えると、簡便な検索をするために同じ作者の金石学作品と目録学作品を並べたこともある上、書道を金石学の分枝として分類したとも考えられる。『水経注』や、『長沙土風碑』などの金石関連の著作は最も重要であることを考えられ、地理類に分類された。この後、尤袤の著した『遂初堂書目』でもこの分類方法を発展させ、目録類全29種の書目のなかの11種は金石学の著作である。尤氏は子部のなかの「譜録」類を発明し、『宣和博古図』・『考古図』・『古器図』・『辨古図』・『石鼓文譜』・『石鼓文考』・『玉



璽記』・『八宝記玉璽譜』・『玉璽議』・『鏡録』・『鼎録』・『刀劍録』及び5種類の貨泉図譜を収録し、全63種類のなかで17種類を占める。余嘉錫氏から「分類できない本を収録しているに過ぎない」<sup>[14]</sup>との批判を浴びたが、実際これは初期形態の金石学とほかの嗜好を並列させる姿勢を示したことである。

特筆すべき目録学の著作は、『通志』である。晁公武の『郡齋讀書志』とほぼ同時期に成立した鄭樵の傑作は、目録学の一部である「芸文略」の史部食貨類「碑碣」・「貨宝」に他の金石学図録を収録しながら、書道の部分を分けて「刀筆」の一部類に収録した。ただし、目録学と比肩されるほど金石学の地位は上がり、「金石略」を作って「芸文略」と並べて載せた。「金石略」の序文において鄭氏は、金石学は文献の校勘と強調しているが、史料として用いることで史学にも言及しようとしたことがわかる。鄭樵は恐れずに大胆な学説を提唱し、金石学において革命的なパラダイムシフトを遂げたと考えられる。しかし、鄭氏の学説は長い間に異端とされて押しのけられ、その価値も明代の章学誠氏により再発見されたことがよく知られているので、鄭氏の貢献は今まであまり参照されてこなかった。考えてみれば、『通志』が成立した時期は、金石に関する文化が金石学に転換した時期だと言うべきである。ただ、鄭氏の研究は二次史料である各書物の記載に基づいてつくられたものであるため、ある程度信憑性は低いとは非難されるものの、金石学の成立に関わることは確かであろう。

この時期に多くの金石の専門的な目録が成立したことも極めて目立った現象である。『宋史』芸文志より収録されたのは、子部目録類に分類されている、欧陽脩の『集古録』五巻をはじめ、崔君授の『金石録』十巻・趙明誠の『金石録』三十巻または『諸道石刻目録』十巻である。金石学は兵家と仏教につづき、目録学では分野別目録に数えると三番目が成立したのである。研究の方法と目的にかなりの共通性が見られ、金石学は四部分類法で史部目録の類に属したことが意義深い。今までも、金石の目録が目録学の目録に属するかどうかが争われてきた。このような論争から脱却し、パラダイムの共通点からの視座をとり、さらに金石学と目録学の関係を考え直した研究が期待される。

以上見てきたように、金石学は両宋の時期に成立した古代碑銘・器物を研究し、古文字学・文学・史学・経学・考古学・芸術と密接に関わる学問である。金石学の研究が一種類の高雅な嗜みから大いに発展し、学界から認められる学問領域になったのはこの時期である。このパラダイムシフトは士大夫社会の形成と不可分な関係であり、その研究によって導かれる結論は士大夫の思考を表現することと等しいと考えられる。

宋代のエリート階層たる士大夫達は、唐代までの知識人達が書道の練習用テキストとして蒐集した碑文や拓本等を歴史研究の材料として用いるようになった。この背景としては、骨董品として収蔵され、かつて美術品・芸術品としてみなされていた文物に対する研究が、当

時代表的な学問であった史学の分野に導入され、それ以降の文人士大夫のイデオロギーの一つとなった。

宋代は「文を貴ぶ」政策により、上は皇室に至るまで金石・文物の蒐集が大流行した。北宋の時期に太宗・真宗・徽宗皇帝はともに金石を好んだ。これからみると、北宋の世が終わるまで、皇室は士大夫の気を引くため、芸術家を気取るようになった。その結果として、金石への造詣は士大夫にとって不可欠な素養となった。厳密に言うと、このように個人的な趣味に浸れるのは儒家の正統観念と全く相違するので、更なる深い文化的な意味を持つであろう。

このような社会において、文学が優れ、唐宋八大家の一人として知られる北宋の欧陽脩は金石や石刻の拓本を蒐集・研究し、『集古録跋尾』十巻を撰して、金石学への道を開いた。

この『集古録』の中で欧陽脩は金石学の目的を、「史伝と与<sup>とも</sup>なひて其の闕謬を正すべき者は、以て後学に伝え、多聞に益せんことを庶う」<sup>[15]</sup>(史書・伝記など文献史料の対照としてつかえ、特に文献史料の見直すことに役に立つべきである。願わくは、これらの史料を後世の学者に伝えて、彼らの視野の開けることに有用であることを願う)と言及した。史学上の意味だけでなく、欧陽脩も金石学の現世利益の側からこの意味を強調する。「余家、古文を集録するは、独だ伝記の訛謬を正すを為すのみならず、亦朝廷の疑議を決するを為すべきなり」(私が文物を集めて銘文を研究するのはただ文献の訛化や誤謬を正すためだけでなく、非常時の際の朝廷の施策の参考のためである)とした<sup>[16]</sup>。ここで、金石学のパラダイムは明らかになり、つまり古器物の銘文を保存し、テキスト化した銘文を文献史料と参照して研究するということが明確になった。

『集古録』のなかで欧陽脩の「秦泰山刻石」という一篇はこの典型例として挙げられる。

#### 秦泰山刻石

右は秦二世の詔、李斯の篆。天下の事、固より不幸より出る者有り、苟に以て世に用いべき者有れば、必ずしも皆賢聖の作にならざるなり。蚩尤五兵を作り、紂漆器を作る、一人の悪を以て万世の利を廃さざるなり。篆字の法は秦の李斯に出。斯の秦の相たるや、典籍を焚棄し、遂に先王の法を滅ぼして独り己の作る所で刻石を以て万世に示さんと欲す、何ぞや。『史記』を按ずるに、秦始皇帝天下に行幸し、凡そ六刻石あり。及び二世立義し、其の旁に詔書を刻みて立つ。今皆亡うや、独りに泰山の頂上に二世の詔僅かに在り、所存は数十字のみ。今俗伝の嶧山碑の者、史記に載さず、又た其の字体の差大きく、泰山に存する者に類ず。其の本は徐鉉に出づ。又た別本有り、夏竦の家に出る者と云う。今市人の鬻る所を以て之を校するに、異なること無し。唐の封演自り碑は真に非

ずと言ひ、而して杜甫は直に「棗木を伝刻するのみ、皆貴ぶに足らずや」と謂う。余の友江隣幾は奉符に謫官し、嘗て自ら泰山の頂上に至りて秦の石を刻する所の処を視、云うに：「石は頑く鑄鑿にべからず、当時何を以て刻むかを知らざるなり。然も四面皆是草木無して野火及ばず、故に此の若き久しきを能くす。然るに風雨の剝る所、其の存する者纔か此の数十字なるのみ」と。本は隣幾の余に遺るなり、今の俗傳の嶧山碑本に比べて特に真の者と為すのみ。<sup>[17]</sup>

上記欧陽脩の文章を意識すると次の通りである。

右記は秦の二世皇帝の詔であり、李斯による篆書で書いたものである。世間に有用なるものはすべて聖人が発明したわけではない。蚩尤は兵器を、紂王は漆器を発明した。彼らは暴君であるが、暴君一人を否定しても、彼らが発明した大変有用なものは廃棄出来ない。篆書の書体は秦の李スによって定められた。彼は秦の相として焚書の政策を敢行した際に、先王の法令を消滅し、自分の作ったものを石に刻んで後世に伝えていこうとした。これはなぜか。

『史記』によると、秦始皇帝は全国巡遊をしたことがあり、六ヶ所の刻石を立てたという。秦の二世皇帝が即位以来、秦始皇帝刻石のわきに詔書を追刻した。いまこれらの史料はほとんど失われており、泰山の頂上には二世皇帝の詔の刻石だけが残されて、数十字にすぎなかった。現在、世間で流通している嶧山碑とされる拓本は『史記』に掲載されていなく、字体も泰山の頂上のもとは異なっている。通行本は徐鉉が作ったとされる。また、別の一版本は夏竦の蔵版だとされる。今の流通している本と対照してみると、内容に異同はみられない。唐の封演は流通している「嶧山碑」の文章は偽物だと指摘した。杜甫も木版印刷された碑文の内容に疑問を示した。奉符に左遷させられた友人の江隣幾は自ら泰山の頂上に至り、秦代の刻石を見学した。彼は「碑石が硬くて彫刻に適せず、当時は何を使って彫刻したかはわからない。しかし、碑のまわりには草木が生えないので山火事に強く、今まで残されている。しかし、銘文は長年の風雨によって曝されたので、この数十字しか残っていない」と言った。この本は隣幾から贈られたものであり、今の流通している版本より信憑性が高い。

傍点のわずか百一字の部分から指摘できるのは三点である。最初に、秦の二世皇帝に憐れむ姿勢を示しながら銘文の書道芸術を鑑賞した後、関連する歴史事件の焚書事件を評価し、最後に司馬遷の『史記』を引用して秦始皇帝刻石の存在状況を論じ、テキストの比較研究を行った上で、自分の所有する拓本の価値を述べている。

この手法は学術に多大な影響をもたらし、史書・経文の内容の討論と比べると、金石史料に基づく議論は変貌した。これは文字史料を中心とする歴史研究からの離脱、つまり伝統文献史料の積読を中心にして注疏を作る研究法から離脱する。これによって新たな学風が形成



して、典型的な「宋学」と見なされる。また、刻石の多くの拓本を集めて比較研究をする方法は、後に木版印刷術の普及以来興った版本学の先触れとなった。歐陽脩は金石史料の重要性を言及し、伝統文献史料のそれと比較した。「銘とは、以て善を彰にして無窮に著す所なり」<sup>[18]</sup>と指摘し、唐代の書道に対する審美から脱却し、歴史との強い繋がりを強調した。「記憶の場」<sup>[19]</sup>とも称される金石史料は継承された書物と比較すると、ある程度自由に見ることの出来るもので、集合的記憶を反映するものとして適している。

### 第3節 金石学をめぐる知識人共同体

金石学者という新たな「解釈的共同体」が団結した役割を果たしたことで、各地にある金石史料に対する学術的関心が高まると同時に、小地域ごとに展開されてきた秦始皇帝像の「解釈共同体」が各地域との交流を通じて、従来、共同体内部でしか語られてこなかった歴史人物像を外部と共有できるようになった。一好例は以下のようなものである。

刻石に興味を持った最初の人物は、嵯峨出身の姚寛（1105～1162年）である。筆記の『西溪叢語』の中で『史記』を読む際に秦始皇帝刻石に関連する記録を残した<sup>[20]</sup>彼は、他の学者達の説をまとめた上で、自ら刻石の考察を試みた。これは美術のみならず、金石史料の問題の解明を兼ねていたことがわかる。彼は秦望山に登って刻石を探しに行ったものの、刻石を文献とおりに発見できなかった。そこでやむを得ず彼が別ルートをとって探しに行った様子が、「復た小径自ら別に一山に至る、俗名は鵝鼻山なり」（小道を通して、俗称が鵝鼻山という山に至った）と記されている。また、「山頂に石有り、屋の如く大きく、中開き、一碑を其の中に挿し、文は皆風雨に剝ぐ所と為る」（頂上は内部がからになっている巨石があって、大きさは部屋と比べるほどである。その中は碑が差し込まれており、碑の銘文が風化した）と山頂の様子も詳述している。しかし、鵝鼻山は薬草採取の専門家でなければ行けないほど険しく、人跡及ばぬ山であった。彼も薬草採集家の案内によって碑までたどり着いた程であった。碑の石材に関して、『越絶書』に記載された「岑石」には疑義を呈したが、「始皇の力に非ざれば、石の中に挿すに能わず」（秦始皇帝ではなければ、この大きな碑は巨石に挿し込めないであろう）と、この碑こそが秦始皇帝の会稽刻石に相違ないと断言した。

二十余年後、姚寛の甥である莫濟（？～1178年）が紹興に職に就いたとき、刻石を探して失敗したことを王十朋に言及され、更なる考察を提案した。彼は漢詩「次韻梁尉秦碑」<sup>[21]</sup>の序文のなかで原因を、「姚令威は鵝鼻山頂の一碑、石屋に挿す所を記す。今石屋は故より在るも、碑は蓋して無し」（姚寛は鵝鼻山の頂上に石屋に差し込む碑のことを記録したが、私が確認したところ石屋はあって、しかもやはり刻石がなくなった）と述べた。このことは王十朋の同名漢詩作品「次韻梁尉秦碑」<sup>[22]</sup>の序文でも参考にする。しかし、王氏は州の幕職

である兪判に任じられていたので、職務が忙しいため見学に行けなかった。結局、彼らの委託を受け、王氏と莫氏の友人である梁安世が刻石を探しに行った。進士に及第をしてから二年目の梁安世は会稽県尉に任じられた。金石学に熱中した彼はやや迷信的な所があり、秦始皇帝の刻石が桃源郷のように隠されていることを心配していた。ある日、彼は休暇をとって雲門寺へ行ったとき、僧侶が何山という山で本物の秦始皇帝刻石を見たことを聞いた。僧侶によって、刻石は李斯の真筆であり、昔何山に避難した人がこれを見たことがある。彼はこれを糸口にして、碑拓の匠と同行して何山に向かったのが1158年のことであった。

梁安世の刻石見学の顛末は「秦碑一紙並古詩呈王梅溪太守」<sup>[23]</sup>という漢詩に記されている。大まかにいうと、長さ三尺あまりの無地の板石があるだけで、磨滅しきった文章があると嘆いたものであった。無理矢理拓本を作って帰った彼は、「惜しいかな此の紙に一画も無し、存亡を記せんと欲すも人に嗤はるるべし」（惜しいかな、この拓本には文字がなくなってしまう。私は秦王朝もしくはこの碑の運命の存亡を記そうとする人で、笑い者になるだろう）という詩句で自嘲した。

上記は事件の全貌である。

まず、梁安世は「秦碑一紙並古詩呈王梅溪太守」という節の中で碑文を得られない悲哀と、多くの典籍に基づいた秦始皇帝の悪政（秦皇不慕仁義業）・尊大（直謂堯舜猶瑕疵）・焚書（焚書欲蓋前代美，寧聞伏生伝有頤）を述懐した。ロナルド・イーガン氏は、儒家は道徳的理由をもって文物を破壊することに合理性を与え、文物とテキストそのものを軽視する立場を表すことがあるといった<sup>[24]</sup>。ここでの梁氏の論議でも、有形の記録を超える「徳」が永遠であるとの意見を表した。（曩時山東之罟石，磅礴入海無津涯。固知秦人遊戯餘，非民之利寧一時。…我聞太古功德盛，鋪写不盡乾坤儀。詩書紙上自不朽，金石還有磨滅期。…後生不廢丞相書，歌頌雖在皆浮辭）と指摘する。

莫濟と王十朋は梁安世の韻を和えて作った漢詩のなかで、秦始皇帝の悪政（莫：此物及見秦亂離。當時威勢振天下，不言慘毒民嗟咨。乘輿所至爲刀鋸，方嶽何暇安禮儀。王：我聞秦人滅六国，酷若犬磔臨江麋。）・尊大（莫：君臣乃爾自賢聖，鯁論不復相瑕疵。王：秦碑誇大頌功德，埋沒草莽無人知…磨崖欲作不朽計，其如曆數不及期。）・焚書（莫：早知金石不可恃，相君應悔燔書詩。王：五經灰飛儒濺血，堯舜周孔何能爲。）におおむね同じ意思を漢詩で述べることで、感情の豊かさやコモンセンスの在処を明確に表現したのである。

ここで、士大夫のネットワークとコミュニケーションを節点とする金石学によってスムーズに存在することが見られる。また、以上の例からみると、地域性があり、集合的記憶を喚起する金石史料を研究する学問も地域性を欠かないであろう。知識社会学理論の通り、金石学そのものは関心ある士大夫たち、または社会に変容を起こす。

金石学の「地域性」というと、研究方法が異なる「各地の金石学」があることではなく、金石学者の地域性と金石史料の地域性を指す二重の意味を持つ。前文で論述した地域性がある金石史料をめぐって、士大夫が集まる例のほか、金石学者の地域性について一つの例も挙げられる。清代に至ると江蘇省の南部・浙江省の西部は金石学の発達地域といわれるのは、江蘇省の南部・浙江省の西部出身の士大夫集団が金石学の重鎮になった。清の名臣呉大澂は広州に任官するときに地元の人から広州周りの金石史料について紹介してもらった。同時期に、同じ地域出身で進士となった葉昌熾は甘肅に任官するとき、敦煌の金石史料について案内された。二人とも拓本を作った後、拓本の一部を故郷の繆荃孫氏に送った。呉・葉・繆の三人はともに江蘇省南部の出身であり、進士になったことが明らかである。逆に、ここで広州と敦煌で金石史料を紹介してくれた人は金石学を中心とするネットワークに入ったとは言うまい、という意味は繆氏の書札・葉の日記に表していた。地域性がある士大夫の活動が文化・学術を中心に展開するとの様相は瞭然であろう。

宋代以後に対して地域社会史の研究は盛んである。概括的に言うと、特に経済史の研究から出発し、市場・共同体・国家といった今日的課題を中国史研究に即して綴った論著は優れている。小論は知識社会学の視点から新たな証拠を添付し、この論題を更に深めていきたいと思う。

## 結びの代わりに

以上の論述をもって、成立した初期において、宋代の金石学が中国の学術系譜における地位について検討してきた。本稿で論じた内容は以下の通りである。

第1節では羅振玉・馬衡・王国維・陸和九・朱劍心諸先学、及び葉国良氏の定義を踏まえて、金石学という学問がどんな学問であるかを考えてきた。宋代において、金石学は雅趣に富んだ書道・骨董品鑑賞から発生し、史料とされる価値の再発見により士大夫の趣味として広めたことを解明した。次に2節では、金石学はどのように学問として成立したかとのことを論じた。もともと嗜好・趣味とされた金石史料に対する収蔵・鑑賞はこれから史学のパラダイムを参照してパラダイムシフトができた上、宋代に成立した目録学の成果により収録されることによって学問に変化したとのことを論じた。第3節では、金石学の成立に従って中国の学問にどのような影響をもたらすのかについて、例を挙げて片隅を述べた。この時期にわたって、地域に積極的に関係する中国知識人はこれからどうして人間＝地域関係を変貌させたのかとの大きな課題に、一つの視座を提供する。

筆者は変革期とされる中国の10～13世紀に学問がどのように変容するかとの問題に注目しているため、この時期に成立した金石学に関する課題について検討をしなければならない。

この時期に成立した金石学は社会の変革を反映する一方、学術の変革を起こすことにより影響を社会に及ぼしていると考えられる。また、今後は学術変革の他方面に関しては次稿以後触れることにしたい。

注

- [1] 馬衡「中国金石学概要」『凡将齋金石叢稿』 p1 中華書局 1977年 原稿1924年
- [2] 陸和九『中国金石学』 p6~8 (明文書局, 1981年)
- [3] 同上 p2
- [4] 陳寅恪「与劉叔雅教授論国文試題書」『金明館叢稿二編』 p224 (上海古籍出版社, 1980年)
- [5] 張典友『宋代書制論略』 p107 (文物出版社, 2012年)
- [6] 朱劍心『金石学』 p3 (商務印書館, 1955年)
- [7] 同上 p3~4
- [8] 劉勰『文心彫龍』卷八「詮賦」
- [9] 羅振玉「与友人論古器物学書」による「宋人作博古圖, 取輯古物, 雖以三代礼器為多, 而範圍至広。逮後世變為彝器款識之学, 其器限於古吉金, 其学則專力於古文字。其造詣精於前人, 而範圍則轉隘。古器物之名, 亦創於宋人趙明誠撰『金石錄』。其門目分古器物銘及碑為二。金蔡珪撰『古器物譜』尚沿此稱。嘉道以來, 始於禮器外, 兼收他古物。至劉燕庭, 張叔未諸家, 收羅益広。然為斯學者, 率附庸於金石學, 卒未嘗正其名。今定之曰古器物學, 蓋古器物能包括金石學, 金石學固不能包括古器物也」『雲窓漫稿』甲稿 p38 (貽安堂刊, 1921年)
- [10] 王国維著「宋代之金石学」による「而金石之外, 若瓦当。若木簡, 無不在當時好古家網羅之内。此宋人蒐集之大功也。」『王国維先生全集初編』第五冊 p2000 (大通書局, 1976年)
- [11] 葉国良『宋代金石学研究』 p3, p228 (台湾書房, 2011年)
- [12] 同上 p5~13
- [13] 四庫全書本に拠る
- [14] 王欣夫『文献学講義』 p50 (上海世紀出版集團, 2005年)
- [15] 「可与史伝正其闕謬者, 以伝後学, 庶益於多聞。」
- [16] 「余家集録古文, 不獨為伝記正訛繆, 亦可為朝廷決疑議也。」
- [17] 「右秦二世詔, 李斯篆。天下之事, 固有出於不幸者矣, 苟有可以用於世者, 不必皆賢聖之作也。蚩尤作五兵, 紂作漆器, 不以一人之惡而廢万世之利也。篆字之法出於秦李斯。斯之相秦, 焚棄典籍, 遂欲滅先王之法而獨以己之所作刻石而示万世, 何哉? 按『史記』, 秦秦始皇帝行幸天下, 凡六刻石。及二世立又刻詔書于其旁。今皆亡矣, 獨泰山頂上二世詔僅在, 所存数十字爾。今俗伝嶧山碑者, 史記不載, 又其字体差大, 不類泰山存者, 其本出於徐鉉。又有別本, 云出於夏竦家者, 以今市人所鬻校之無異。自唐封演已言嶧山碑非真, 而杜甫直謂「棗木伝刻爾, 皆不足貴也」。余友江鄰幾謫官於奉符, 嘗自至泰山頂上視秦所刻石处, 云: 石頑不可鑄鑿, 不知當時何以刻也。然而四面皆無草木而野火不及, 故能若此之久。然風雨所剝, 其存者纔此数十字而已。本鄰幾遺余也, 比今俗伝嶧山碑本特為真者爾。」
- [18] 「銘者所以彰善而著無窮也」
- [19] ピエール・ノラ『記憶の場—フランス国民意識の文化・社会史—』谷川稔監訳 (岩波書店, 2002年)
- [20] 「『史記・秦始皇本紀』云: 上会稽祭大禹, 望於南海, 有立石刻, 頌秦德。『越絶』云: 始皇以三十七年来游会稽, 以正月甲戌到越, 留舍都亭, 取錢唐浙江岑石。石長丈四尺, 南北面広一尺, 東西面広一尺六寸。刻文於大越東山上, 其道九曲, 去越二十里。『水經』云: 秦始皇登会稽山,



刻石紀功，尚在山側。孫暢之『述征記』云：丞相李斯所篆也。『梁書』：竟陵王子良為會稽太守，范雲為主簿。雲以山上有始皇刻石，三句一韻，多作兩句讀之，並不得韻。又字皆大篆，人多不詳。雲夜取史記讀之，明日登山讀之如流。張守節云：會稽山刻李斯書，其字四寸，画如小指圓鑄，今文字整頓，是小篆字。予嘗上會稽東山，自秦望山之巔並黃茅，無樹木。其山側有三石筍，中有水一泓，別無他石。石筍並無字，復自小逕別至一山，俗名鵝鼻山。又云：越王棲於會稽，宮娥避於此，又云娥避山。山頂有石如屋大，中開，插一碑於其中，文皆為風雨所剝。隱約就碑可見缺画，如禹廟沒字碑之類。不知此石果岑石歟？非始皇之力不能插於石中。此山險絕，罕有至者，得一採藥者則至之耳，非偽碑也。或云大篆，或云小篆，皆不可考。」

姚寬『西溪叢語』p 95（中華書局，1993年）による。

- [21] 「六王失國四海歸，秦皇東刻南巡碑。法因史籀有增減，名與蒼頡爭飛馳。自言功德可歌頌，黔首箇箇愚無知。海神何故獨拒命，風濤塞路蟠蛟螭。羣臣諂佞仙藥遠，死生治亂分兩歧。山靈不可守碑記，片段應作龜牀支。陵谷雖存世代異，耳目雙被誕者欺。只餘紙本落人世，千古遺臭東南崖。我聞秦望最高峻，城域所見非昔時。何山距縣四十里，符合傳記壯且奇。眾峰乃是子孫行，古木幾換蛟龍枝。指東作西未足怪，父老流傳從小兒。政如塗山玉帛會，漫不可考歲久之。梁君史隱年甚少，鬱鬱寸角初解纜。裹糧挈榼訪古跡，氣味蕭散如分司。忽聞片石在絕頂，小篆無乃斯翁為。手披荆棘誅虎兕，拄杖直叩山頭皮。模糊豈復有字画，此物及見秦亂離。當時威勢振天下，不言慘毒民嗟咨。乘輿所至為刀鋸，方嶽何暇安禮儀。關中屢棄百二險，曆數浪指億萬期。君臣乃爾自賢聖，鯁論不復相瑕疵。陳述安知百世後，樵夫牧子笑脫頤。興亡俄頃三歎息，撫掌重閱太史辭。假使玉筋餘筆画，文過其實世所嗤。早知金石不可恃，相君應悔燔書詩。

【序文】秦會稽石刻，唐人如張守節，司馬貞，皆嘗援以證『史記』。紹興初，舅氏姚令威刪定登山弔古，見碑石猶存。後二十餘年，分教是邦，以語簽判王龜齡，勉邑尉梁君求之，則石已缺，字不可見矣，以詩記其事。龜齡既廢之，以濟首發其端，書以示濟。按會稽秦頌德碑凡二百九十六字，視秦世泰山，之眾諸刻，獨此碑字為最多。唐李嗣真云：斯小篆之精，古今妙絕，秦望諸山及皇帝玉璽，猶千鈞強弩，萬石洪鐘；豈徒後學之宗匠，亦是傳國之遺寶。周越『法書苑』獨載『封禪碑』數十字而已。至歐陽公，趙德父，集錄天下金石遺文殆盡，亦不復有『秦望山碑』。姚令威紀鵝鼻山頂石屋所插一碑，今石屋故在，碑蓋無有。梁次張所模片紙，指為秦碑，乃在何山，其去鵝鼻尤為隔絕。盡記本末，以俟後之君子。」

北京大學古文字學研究所編『全宋詩』第37冊，p 23234（北京大學出版社，1998年）による。

- [22] 「姬嬴遺迹存者希，世傳石鼓稽山碑。石鼓揄揚得韓子，文與二雅爭驅馳。秦碑夸大頌功德，埋沒草莽無人知。或言山頂石猶在，上有虎豹龍蛇螭。神藏鬼護荆棘蔽，崖懸磴絕登無歧。廣文好奇穴探禹，梅仙喜事僧尋支。我贊其行要親睹，勿受世俗流傳欺。望秦秦望兩嶺絕，何山壁立東南涯。豐碑屹植最高處，不知磨滅從何時。剔苔掃墨了無有，模糊片紙亦足奇。濃雲霧黯將雨，古木槎牙蟠老枝。歸來走筆出險語，訶政叱斯同小兒。詩成得得寫寄我，詞嚴意偉法退之。我聞秦人滅六國，酷若犬獠臨江麋。先王法為秦所負，負秦況有秦有司。五經灰飛儒濺血，堯舜周孔何能為。上蔡獵師妙小篆，奴視俗體徒肥皮。東封太山南入越，大書深刻光陸離。沙丘風腥人事變，鬼饑族赤誰嗟咨。漢興萬事一掃去，惟有篆刻餘刑儀。磨崖欲作不朽計，其如曆數不及期。蚩尤五兵封漆器，人物美惡寧相疵。我雖過秦愛遺画，南山入望賴支頤。不須嶧陽訪棗刻，不用遷史觀雄辭。虛堂默坐對此紙，閉眼暗想君勿嗤。要知秦碑沒字本，却類周雅無辭詩。

【序文】會稽秦頌德碑，丞相李斯篆，世傳在秦望山，莫知所在。教授莫君好奇嗜古，搜訪尤力。有言碑在何山者，莫以語某，何山見於圖經，在秦望東南，疑其真秦望也。某欣然欲往，職有所拘，以告會稽尉梁君。梁慨然而行，登山果見之，碑石僅存，字磨滅已盡。墨片紙而還，作古風長韻，具記始末。因次其韻，且記吾三人好事之癖，亦以示後人也。」

- [23] 「公生博物好奇古，勸我搜求秦望碑。我來稽陰且三載，夢寐絕頂雲俱馳。事非近代問父老，鼻



祖已來猶不知。或云其山多虎狼，困湫罅井蟠蛟螭。魍魎木客忌人到，陰霾賊霧迷羊歧。樵夫懸磴懼失勢，一落萬丈誰能支。吾意此如鍾乳穴，民昔畏擾相譎欺。曩時山東之罌石，磅碎入海無津涯。固知秦人遊戲餘，非民之利寧一時。暇日登臨雲門寺，僧曰若耶溪上奇。山曰何山勢最峻，丹鶴夜宿天孫枝。南望天臺西錢唐，下視峰岫如羣兒。李斯篆書真刻本，昔人避亂此見之。裹糧遂借墨工往，扳崖貫木如鹿麋。舉觴酌酒山之神，千古呵護煩神司。銷鑠僅存三尺許，龜趺就鑿山石爲。剝苔剔蘚隨手剝，面節背角摧霜皮。老龍脫甲蛇解蛻，鋪紙拭墨漫披離。收藏入袖恍若失，遐想往昔還嗟咨。我聞太古功德盛，鋪寫不盡乾坤儀。詩書紙上自不朽，金石還有磨滅期。秦皇不慕仁義業，直謂堯舜猶瑕疵。焚書欲盡前代美，寧聞伏生傳有頤。後生不廢丞相書，歌頌雖在皆浮辭。惜哉此紙無一画，欲記存亡人應嗤。他年好事繼追訪，姑願首尾觀吾詩。」

上同，第 46 冊，p 28962 による。

- [24] Ronald C. Egan *The Problem of Beauty: Aesthetic Thought and Pursuits in Northern Song Dynasty China* (Harvard University Press Harvard East Asian Monographs, 2006)

(だん う 学習院大学国際研究教育機構 RA)

# A Re-Evaluation of Song Dynasty Epigraphy: A Perspective on Its Connection with Scholar-Official Society

Yu Duan

## Abstract

The aim of this paper is to study the position of Song dynasty epigraphy (*Jinshixue*) in Chinese academic history. The first part of the paper seeks to clarify the connotation of Song dynasty epigraphy by critiquing the traditional definition of Chinese epigraphy held by many contemporary scholars. By reviewing the process of the establishment of the field of Song dynasty epigraphy, this elegant hobby of inscriptions is explained as an aesthetic art form which then developed into an academic discipline. Finally, the paper illustrates the relationship between the formation of the Song dynasty epigraphy and the maturity of the scholar-official society. It would become the representative knowledge of the Song dynasty, prompting the well-known scholar Wang Guowei to say, “It is in fact the academic discipline of the Song era”, inseparable from the characteristics of the scholar-official class, such as geography, regionalism and the formation of the knowledge community.